

反出生主義と死亡促進主義  
Antinatalism and Pro-mortalism

長谷奏音

**Abstract**

The intrinsic harm of death has been regarded as a key issue regarding whether antinatalism leads to pro-mortalism. This paper challenges this view, focusing on Jiwoon Hwang's argument showing that the question of whether antinatalism leads to pro-mortalism can be addressed independently of the debates over the intrinsic harm of death. By developing his argument, this paper argues for the strong connection between antinatalism and pro-mortalism. In consequence, antinatalists need to think more seriously about their response to pro-mortalism than ever before.

**(1) 研究テーマ**

反出生主義から死亡促進主義が導かれるかを検討する先行研究では、死の自体的な害についての議論が大きな争点となっていた。しかしジウン・ファンの提案する仕方では死亡促進主義を理解すると、反出生主義と死亡促進主義の間の関係を検討するとき、死の自体的な害をめぐる議論は不必要だと分かる。このことを踏まえて、反出生主義と死亡促進主義についての議論を整理する。

ファンの研究は、論文誌に掲載されていないため、反出生主義をめぐる論争に大きなインパクトをもたらす可能性があるにもかかわらず、広く知られているとは言えない。本論文の目的の一つは、ファンの議論を反出生主義と死亡促進主義をめぐる議論枠組みに位置付けることを通じて、彼の研究を紹介することである。

**(2) 研究の背景・先行研究**

まずベネターがどのようにして反出生主義を主張し、次にどのようにして死亡促進主義を主張に含めない、つまり自殺は推奨しないと述べたのかを確認する。

ベネターが反出生主義を擁護する議論は大きく 2 つの部分に分けられる。まず生殖についての 4 つの直観の最善の説明として価値論的非対称性を擁護

し、そこから存在する場合と存在しない場合のシナリオ間の比較を行うことで、常に存在しないほうがよいことを示す。そして次に、より経験的に人間の人生の質（QOL）の一般的な低さが述べられ、生を存在しはじめさせないことの重要性が主張される。前者を価値論的非対称性からの議論、後者をQOLからの議論と呼ぶことにする。

価値論的非対称性からの議論の概要は以下である。まず快樂と苦痛それぞれの存在と不在についての評価を行う。それは以下の4つのテーゼに表される(Benatar2006 p.30)。(1) 苦痛の存在は悪い。(2) 快樂の存在はよい。(3) 苦痛の不在は、そのことで益されるものがないなくても、よい。(4) 快樂の不在は、それが剥奪となるものがない限り、悪くない。(1)と(2)の対称的な評価とは異なり、(3)と(4)の間の非対称な評価には異論があるだろうと述べたうえで、私たちの生殖に関する4つの非対称的な直観が、(3)と(4)の間の非対称性によってとてもよく説明されることからこれを擁護する。そして先の4つのテーゼを以下のように表にする(Benatar 2006 p.38 Figure 2.1)。

シナリオ A (X が存在する)	シナリオ B (X が決して存在しない)
(1) 苦痛の存在 (悪い)	(3) 苦痛の不在 (よい)
(2) 快樂の存在 (よい)	(4) 快樂の不在 (悪くない)

このシナリオ A とシナリオ B を比較すると、苦痛については(1)と(3)を比べてシナリオ B がよいといえる。しかし快樂については(2)と(4)を比べてシナリオ A がよいとはいえない。これはなぜかという、(2)の快樂の存在のよさはシナリオ A のなかで快樂が存在しないことと比べた相対的なよさであり、シナリオ B の快樂の不在とそのまま比べられるものではないからだ(Benatar 2006 pp.40-2)。このことは前述のテーゼ(4)の「それが剥奪となるものがない限り」という条件にも反映されている。このようなシナリオ A とシナリオ B の比較から、シナリオ B のほうが常によいと主張され、決して存在しない方が常によく、常に生まれてこない方がよいという主張につながる。

QOLからの議論ではまず、人生の質の自己評価はしばしば過大になることや、他の人と比べて相対的に評価しがちであることから、人生は実際にとっても悪いものであるのに人々はそれをわかっていないと主張する(Benatar 2006 pp.64-9)。また影響力のある3つの人生の価値についての学説である、快樂説と欲求充足説と客観的リスト説のどの立場にたっても、人生がとても悪いと考えることができる理由を説明して、最後に現代の世界の実際の悪さ

の量を強調する(Benatar 2006 pp.69-92)。

価値論的非対称性の議論と、QOLからの議論は以下のような関係だ。価値論的非対称性からの議論を受け入れられるなら、人生に少しでも苦痛が含まれてさえいれば、生まれてこない方がよいことになる。しかし価値論的非対称性からの議論を受け入れられなかったとしても、苦痛の多い人生は悪いものであり生まれてこない方がよいとはいえる。そのため、QOLの議論に基づいて人生がどれほど悪いのかを示すことから、存在しない方がよいと主張できる。

以上がベネターの反出生主義の議論の概要だった。このような主張の後で、ベネターは死については、「存在してしまうことは害悪であるという見解と、もし存在してしまっただけの場合は存在し続けるより存在しなくなった方がよいという見解に、辻褄の合わないところは全くない。[...]それにもかかわらず、存在してしまうことは常に害悪であるという見解は、死が存在し続けるよりもよいということや、さらには自殺が(常に)望ましいということを含む(Benatar 2006 p.212-3)」と述べて、反出生主義は死亡促進主義の立場とは矛盾するものではないが、しかし必然的な繋がりを持たないものであると主張している。この理由として、存在者は存在し続けることに利害関心を持つことがあげられ、それゆえに「続ける価値のある人生の質的な閾値よりもはじめる価値のある人生の質的な閾値を高く設定するよい理由がある(Benatar 2006 p.213)」と述べられる。そのために、生まれないほうがよいというためにはごく少量の害悪を避けることを理由にできるが、死んだほうがよいというためには、生き続けたいという利害関心よりも害悪が十分に深刻でなければならないことになり、そのために死は常には望ましいということにならないと結論づけられる(Benatar 2006 pp.212-3)。そしてQOLがこの利害関心を無効化するほど低いかどうかの判断はその人生を生きる人が担うものであり、またその判断が非合理であったとしても、その結果は子どもを作る場合とは違って自分で耐えるものであるために、許される非合理であると述べる(Benatar 2006 pp.218-9)。ここで明示はされていないが、自分が害を被る非合理的な判断は、子どもという他者が害を被るものと違い許されると述べているのは、暗黙に他者危害原則に基づいていると考えられる。このことに加えて、自殺によって残された周囲の人間が強い苦痛を被ることなどから、自殺は全面的に推奨することはできないと述べるが、一方でベネターは自殺は一般的に考えられているよりも非常に多くの場合に合理的であるとも述べている(Benatar 2006 pp.219-20)。またベネターは、自殺や安楽死の擁護を Benatar(2017)などの他の著作でも主張している。

上記のように、ベネターは反出生主義が死亡促進主義を含意することを否定するのだが、それでもやはり、反出生主義を擁護する論証から死亡促進主義も導かれてしまうのではないだろうか。この点を指摘する先行研究を、Hwang(2017)を中心に検討していく。最初に反出生主義は死亡促進主義を導くと指摘したのは Harman(2009)だ。Sullivan-Bissett& McGregor(2012)は、ハーマンの議論を批判し、反出生主義から直接に死亡促進主義が導かれるわけではないと主張しながらも、死の害について特定の立場をとることにより、そうした導出が可能になると論じた（彼らの議論については第三章で詳しく検討する）。ハーマンとマクレガーらの研究はベネターによって応答されている (Benatar2013) (Benatar2012)。しかし、ファンの研究は比較的新しく、また論文誌に掲載されておらずインターネット上に公開されているのみであり、ベネターによる応答はまだ行われていない。しかし、そこでは反出生主義から死亡促進主義を導く議論の一例が構成されており、後に述べるように死亡促進主義についての重要な見解が提案されるため、紹介の意味も含めて丁寧に取り上げる。

死亡促進主義を導くファンの議論は以下である。ベネターの価値論的非対称性は、生まれてきて存在する場合の快樂と苦痛の存在と、決して生まれてこず存在しない場合の快樂と苦痛の不在を上記の図のように評価するものだった。そこに X が存在をやめる場合のシナリオ C の苦痛と快樂の不在と、X が存在している場合のシナリオ A の快樂と苦痛の存在についての評価を加えた表を提示する (Hwang2017 pp.3-4)。これはファンが推測するベネターの評価だが、(5)と(6)はベネターが(2)と(4)の比較を説明する部分 (Benatar2006 p.40-3)から、(7)と(8)は死後のシナリオ C に言及している部分 (Benatar2006 p.45)から、この整理は正しいだろうと考えられる\*。

シナリオ C(X が存在をやめる)	シナリオ A(X が存在する)		シナリオ B(X が 決して存在しない)
(7) 苦痛の不在 (よい)	(5) 苦痛の不在 (よい)	(1) 苦痛の存在 (悪い)	(3) 苦痛の不在 (よい)
(8) 快樂の不在 (悪い)	(6) 快樂の不在 (悪い)	(2) 快樂の存在 (よい)	(4) 快樂の不在 (悪くない)

この表のように評価を行うと、存在し続けるかどうかの考慮の際には古典的な功利主義のように苦痛と快樂の差し引きを行う一方で、存在しはじめるか

どうかの考慮の際には消極的功利主義のように苦痛の量のみを考えるという奇妙な見解を導くために、上の表のような評価は間違いであるとファンは考える(Hwang2017 p.6)。この問題を避ける方法として、ファンは以下のような評価の改変を提案する。まずファンはベネターが(2)と(4)の評価の間に優劣関係がない、つまり存在しないことによる快樂の不在は、存在するときの快樂の存在よりも「より悪い」とは言えないと主張していることに着目し、(4)と(6)(8)の評価の間にも優劣関係がないと考えられることを指摘する(Hwang2017 p.5)。つまり存在しないことによる快樂の不在が、存在するときの快樂の不在や存在しなくなることによる快樂の不在よりも、より悪いともよりよいとも言えないはずだと指摘する。そうであれば、(4)と(6)(8)に異なる評価をする理由がなくなり、そのとき上で拡張した表は以下のように変更される(Hwang2017 pp.4-5)。

シナリオ C(X が存在をやめる)	シナリオ A(Xが存在する)		シナリオ B(Xが 決して存在しない)
(7) 苦痛の不在 (よい)	(5) 苦痛の不在 (よい)	(1) 苦痛の存在 (悪い)	(3) 苦痛の不在 (よい)
(8) 快樂の不在 (悪くない)	(6) 快樂の不在 (悪くない)	(2) 快樂の存在 (よい)	(4) 快樂の不在 (悪くない)

この表のような評価が行われるときに、人生の質の評価について穏当な快樂説をとると、死亡促進主義が導かれる。つまり、ベネターが(1)(2)(3)(4)の評価と比較から反出生主義を導くのと同じやり方で、(1)(2)(7)(8)の評価と比較から死亡促進主義を導くことができる。このときに、生まれてこない方がよく、生まれてしまった場合も存在することをやめた方がよいということになる。反出生主義から死亡促進主義が導かれることはファンによってこのように説明された。

ここまでで、反出生主義から死亡促進主義を導く議論の一例としてファンの議論を紹介した。本論が重要なものと考え積極的に擁護するのは、ファンの次の主張である。

ファンは死亡促進主義の理解には2種類のものがあり、死の自体的な利益により死の望ましさを説明するものと、より遅く死ぬこととより早く死ぬことを比べて、より早く死ぬほうが害が少ないことから死の望ましさを説明するものがあると述べる。ここで本論では前者を「自体的死亡促進主義」、後者

を「比較的死亡促進主義」と呼ぶことにする。ファンによると、自体的死亡促進主義は死を自体的な利益と考えるために、死の利益を享受するために存在しはじめることが肯定されてしまいかねないが、これは非常に不自然なことである(Hwang2017 p.14)。また反出生主義とも相容れないものであるため、死亡促進主義の理解としては比較的死亡促進主義のほうが適切だろう。そして比較的死亡促進主義では、より早い死のより遅い死との比較による相対的なよさから死を利益と考えるのであり、死それ自体の価値は関係しないと主張する(Hwang2017 pp.14-5)。より早い死とより遅い死には、タイミングの違いはあるもののどちらにも死が含まれているため、これらの比較では死の自体的な価値が関係しないということだ。

本論ではファンの主張を受け入れ、反出生主義と死亡促進主義の関係を論じる際には、比較的死亡促進主義の枠組みで考えることに賛同し、このことによって議論状況が整理できることを次節で説明する。

### (3) 筆者の主張

マクレガーらは、反出生主義から死亡促進主義が導かれるかを論じる際に、死がそれ自体で害をもつのかという問題が争点になると主張した。本章ではまず、ベネターを含めた何人かの論者が、実際にそのような文脈で死の害について論じていることを確認し、そのうえで死の自体的な害をめぐる問題が比較的死亡促進主義の枠組みでは争点でなくなると論じる。つまり、反出生主義と死亡促進主義について論じる際には、死の自体的な害への言及が的外したものになることを確認する。この議論により、反出生主義と死亡促進主義を切り離す大きな理由が1つ無くなることを示すことができ、反出生主義は死亡促進主義を導くという立場を強化することになる。

マクレガーらの議論は次のように進む。まず反出生主義の主張が正しいならば、存在しはじめることだけが害なのではなく存在自体が害であることになり、それならば存在してしまっただけの場合にも存在しなくなることはよりよいことになる。したがって、存在しなくなる際になにか大きな害が生じるのであれば、存在するのをやめたほうがよいということになり、死亡促進主義が帰結するだろうと述べる。そのうえでマクレガーらは、もしベネターが上記の論証に反論するのであれば、存在しなくなることそれ自体に、つまり死ぬことそれ自体に害があると論じなければならぬと主張した。そしてそのために、エピクロス派のテーゼとして広く知られている「死は何ものでもなく、それゆえ害でもありえない」という主張を論駁する必要があると述べた。

これに対してベネターは、エピクロス派のテーゼが正しければ反出生主義

から死亡促進主義が導かれるとしても、エピクロス派のテーゼが正しいと考える特別な理由はなく、また人気のある立場でもないため、エピクロス派のテーゼに反論する立証責任はベネターの側にないと主張する。そのうえで、エピクロス派のテーゼの正しさを示す論証が提示されない限り、マクレガーらの批判は効力をもたないと論じた。

しかし中川(2020)によれば、ベネターはのちに死の内在的な害として消滅説を提出することで、マクレガーらを筆頭とする死亡促進主義に関する批判に応えようとしているという(中川 2020 p.53)。

また中川は死亡促進主義について以下のように論じている。まず存在しなくなった場合の快樂と苦痛の評価を含めるような価値論的非対称性の拡張を行い、このときに死亡促進主義を取らないなら、その理由は生きることの内在的価値を認めているか、死それ自体が大きな害を持つと考える場合であると分析する。そして前者は反出生主義と相容れないので、後者の死の害についての考察を行なった上で、やはり反出生主義をとりながら死亡促進主義を取らないことは難しいと結論づける(中川 2020 p.81)。

また Metz(2011)も、ベネターが死亡促進主義を否定するのは死の自体的な害があると考えているからではないかと指摘している。

このように、反出生主義から死亡促進主義が導かれるかどうかを検討するために、死の自体的な害の有無は重要な論点になっていた。しかし比較的死亡促進主義の枠組みでは、この論点を考慮する必要がなくなる。マクレガーらをはじめとする批判者たちは、反出生主義を採用しながらも死亡促進主義を拒絶するための逃げ道として、死の自体的な害をめぐる論点を提示したが、この論点は比較的死亡促進主義を拒絶するための逃げ道にはならない。マクレガーらが示した逃げ道が、比較的死亡促進主義ではそもそも逃げ道として開かれていないため、その道の先にある死の自体的な害の議論は関係がなくなるのである。

以上で、自体的な死の害から死亡促進主義を否定できる可能性がしばしば提案され論じられてきたが、比較的死亡促進主義の枠組みではこの論点は検討しなくてよいことを主張した。このことにより、議論の状況が大きく整理され論点が絞り込まれる。注意すべきなのは、このことで反出生主義が死亡促進主義を導くのではないかという批判は弱まるのではなく、むしろ批判に対して死亡促進主義を含まないと反論する余地が少なくなることだ。

第2節で紹介したベネターが自殺を推奨しない理由は、大きく3つあった。1つめは、人は存在を続けることに利害関心を持つことであり、2つめは、子どもを作る場合とは異なり自殺についての判断は非合理が許される自己決定

的な判断であることであり、3 つめは自殺によって残された周囲の人間が強い苦痛を被ることであった。価値論的非対称性からの議論が比較的死亡促進主義を導くとしても、これらの理由はそのまま残る。しかし、これらの理由に依拠することで、比較的死亡促進主義を採用しないことが正当化できるなら、同じことが反出生主義についても言えてしまうだろう。つまり、子どもを持ちたいと願う人の利益や社会機能の維持という利益を理由として、この利益に賛同するかはさておき、反出生主義を採用しないことが正当化されてしまうだろう。そのため、自殺の道徳的評価について価値論的非対称性とは別の理由に訴えることを許すのであれば、出生について反出生主義を擁護する議論も弱まってしまう。他方で、出生を望ましいものとするさまざまな理由があるにも関わらず、価値論的非対称性のみから反出生主義を採用すべきだと主張するなら、比較的死亡促進主義も同じように採用すべきだと考えることになるだろう。反出生主義と比較的死亡促進主義はこのような強い結びつきを持つ。

#### (4) 今後の展望

本論では反出生主義は死亡促進主義を導くのではないかという議論の整理を行いながら、反出生主義と比較的死亡促進主義の結びつきが強いものであることを主張した。この主張が正しければ、反出生主義者は死亡促進主義をもっと真剣に受け止め、反直観的なこの立場の扱い方を考えなければならないことになる。そしてこの問題に対処したとしても、反出生主義には他にも解決すべき多くの重大な問題が残されている。特に問題が多く擁護が難しいのは価値論的非対称性である。価値論的非対称性が成立しないなら、反出生主義を導く2つの議論の片方が失われたことになり、反出生主義者にとってのダメージも大きい。そのため本論で整理した死亡促進主義を争点とする批判に対応したとしても、依然として反出生主義は分が悪い状況が続くだろう。

今後の展望として、死亡促進主義を含む反出生主義の、子どものためを思うなら生まない方がよく自分のためを思うなら死んだほうがよいという考えには賛同しながら、その根拠に対する建設的な批判を試みたい。具体的には、妥当な反論が多く擁護することが困難なベネターの価値論的非対称性に頼らずに、反出生主義を擁護する議論を探りたい。たとえば、「他者を益する義務はないが、他者の害を防ぐ義務はある」といった義務論的な原則や、快樂よりも苦痛を重視すべきという消極的功利主義の原則に基づいて、反出生主義を支持する一般的な論証が構成できるかもしれない。あるいは、出産に関する具体的な悪さを根拠とする主張も望みがありそうである。こうした議論の



構成が今後の課題である。

---

\*ファンが自殺の是非に直接は関係しないようにみえる(6)を表に加え、さらに変更した理由を考える。その理由の1つは、(6)が「悪い」ならば比較的死亡促進主義の枠組みでも、ある死によって短くなった分の生に含まれたはずの(6)の快樂の不在の悪さから、より早く死んだ方がよいと常には言えなくなるためではないだろうかと考えている。しかしベネターの議論の上では、(6)の評価を「悪い」から「悪くない」に変更することはできない。ベネターは(2)は(6)との比較でよいのであり、(4)はそれゆえに悪くないのだと述べていたからだ。この議論に乗らずに(4)と(6)に同様の「悪くない」という評価を与えることは可能であり、ファンもこのベネターの枠組み自体を批判したかったのかもしれないが、ここではこの点についての議論はここまでにしたい。この点についてのより詳しい議論として中川(2020)がある。

#### (5) 参考文献

Benatar, D.(2006). *Better Never to Have Been: The Harm Of Coming Into Existence*, Oxford University Press. デイヴィッド・ベネター『生まれてこない方が良かった—存在してしまうことの害悪』、小島和男・田村宣義訳、すずさわ書店(2017)。

Benatar, D.(2012).Every Conceivable Harm : A Further Deference to Anti-Natalism. *South African Journal of Philosophy* 31(1) : 128-64. デイヴィッド・ベネター「考えうるすべての害悪」、小島和男訳、『現代思想』47(14):40-83

Benatar,D.(2013).Still Better Never to Have Been: A Reply to (More of) My Critics. *The Journal of Ethics volume 17*:121-151.

Benatar, D.(2017). *The Human Predicament*, New York: Oxford University Press.

Harman,E.(2009).Critical Notice of Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence by David Benatar. *Nous, December 2009* :776-85.

Hwang, Jiwoon,2017."Why it is Always Better to Cease to Exist" Available at SSRN: <https://ssrn.com/abstract=3184600> or <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.3184600>

Metz, Thaddeus.(2011).Are Lives Worth Creating?. *Philosophical*

*Papers*, 40 (2).233-255.

Sullivan-Bissett, E. & McGregor, R.(2012). better no longer to be. *South African Journal of Philosophy* 31 (1):55-68

中川優一(2020)「存在否定の前にあるもの--反出生主義における存在肯定の可能性--」、東京大学大学院総合文化研究科修士論文（未刊行）

（神戸大学）